

2024年12月29日（降誕後第1主日、C年）

牧師メッセージ

「人であり、神であるイエス」

（ルカによる福音書2:41-52）

司祭ヨセフ太田信三

初代教会において、「キリスト論」という重要な神学的議論が起きました。それは、イエスは人であるか、神であるか、という問への取り組みでした。今でこそ、「イエスは完全に人であり、完全に神である」という教理が定められていますから、私たちはこのことを当然のように知ることができますが、教理が定まるまでの議論は、イエスが神でなければならぬと主張する人々と、イエスは人でなければならぬと主張する人々の間で激しく交わされたのです。イエスが人であるなら、十字架上で「神が苦しんでくださった」ということがなくなってしまいます。他方、イエスが神であるなら、イエスは私たちとは異なる存在となってしまうため、イエスが十字架で死に、復活したという出来事が、私たちと遠い出来事、無関係な出来事になってしまいます。これは解決などあり得ない、果てしない議論に思われました。しかし、まさに聖霊が働き、「イエスは完全に人であり、完全に神である」という真理が教会に明らかにされ、議論は決着したのでした。

今日の福音を読むと、まさに、イエスは完全に人であり、神であることがわかります。まず、イエスが両親のもとで、私たちと同じ人間として成長していったことがわかります。また、神殿の境内で教師たちとやりとりしている姿や、マリアへの言動は、イエスが神であることを示しています。幼少期のイエスが描かれる場面は聖書ではここだけです。クリスマスを祝うシーズンを過ごす私たちが、この箇所をヒントに、あらためて、イエスさまがどのような方なのか？と問い直すことはとても大切なことです。それはすなわち、御子が生まれてくださったことの意味を捉え直すことだからです。もしかしたら、イエスを知った気になって、イエスを自分の都合の良い存在にしてしまっている可能性もあります。イエスが神であるからこそ、私たちの罪を担い、私たちを赦し、何より共に苦しんでくださる神のことを私たちはイエスを通して知ることができます。同時に、イエスが人であるからこそ、死んで復活するという道が私たちにも開かれるのです。神秘としか言いようがない、その存在によって私たちに赦しと救いの道を開いてくださったイエスの姿を、あらためて自らのうちに迎えたいと思います。